

NEW SONG

新生讃美歌ニュースレター

さんびか大好き！

金子 敬（古賀教会牧師）

後の世代のためにこのことは書き記されねばならない。

「主を賛美するために民は創造された。」 詩編102：19

私がクリスチャンになる決断をしたのは1962年11月13日で、その5日後の18日の日曜日に初めて教会の礼拝に出席しました。罪赦されて神の子とされたという喜びに満たされていましたから、礼拝で歌う讃美歌は、歌詞の一節一節がそのままに自分自身の告白と重なり、何を歌っても涙が流れるというものでした。それまで「暗きにすむ人」であった私にとって、アドヴェントの曲“あさひはのぼりて”（教団讃美歌97）はそのまま私の告白の歌となり、教会への行き来の道でよく口ずさんだものです。

当時は教団讃美歌がよく用いられていましたが、やがて手許に新生讃美歌、 が届けられ、ついに1989年に礼拝でも用いることのできる「新生讃美歌」が出版されました。その時、一人のお年寄りから請われるままに、無謀にも歌える曲全てを私たち夫婦でカセットテープ（伴奏もなく）に吹き込み、お渡ししたこともあります（今の「新生讃美歌」でしたら、新生讃美歌CD-ROMで伴奏曲を聴くことができます！）。その後、その方は独り老人ホームで、よくこのテープをかけてくださっていたようです。

賛美歌は上手下手ではなく心の歌です。それはある時には神の恵に対する喜びの応答であり、ある時には悲しみや苦しみの中からの魂の叫びです。それが賛美です。

教会の礼拝に賛美は欠かせません。聖歌隊も素敵です。私は聖歌隊が完璧な歌唱力で賛美することにも感動するものですが、しかしそれ以上に、聖歌隊の賛美が会衆一同の賛美を包み込んで、神様の前に一つの賛美のいけにえとなって献げられていく時にこそ、最高の感動に浸りません。礼拝はそのどの部分を切っても、神への献げものだからです。

会衆の賛美にも注文があります。それは讃美歌集を読むような歌い方から解放されることです。確かに新生讃美歌の何番かを一緒に歌うのですが、一瞬で歌詞の一句を読み取り、心に受けとめ、讃美歌集から目を離し、目を上げて献げものとして賛美してほしいのです。教会によっては会衆賛美のリードをする人が立って下さいます。しかし、何人の人がリードして下さる方に向かって顔を上げて賛美しているのでしょうか。「ひたむき」は良いですが、「下向き」では賛美になりません。・・・おっと、賛美で愚痴ってはいけませんね。

新生讃美歌と私

～新生讃美歌50年のあゆみから～

第9回 主にあって一つの讃美歌編集を

山中 先代

『新生讃美歌』(2003)

編集委員

クリスチャンホームに育った私は、17才で受洗するまでに、教会や学校、両親の教会等で歌い続けて来た讃美歌・聖歌・その他の賛美歌が、混然と体の中に入っていたように思います。1959年、結婚を機にバプテスト(佐賀基督教会)に移ってからは、主人が音楽主事を拝命し、ナザレンからバプテストに移り、日本の楽器を礼拝賛美に用いる事を、日本で最初に手掛けられた初代加来国生牧師の教会で、豊かな賛美を追求する事が使命づけられる生活になりました。

今『新生讃美歌の歩み』のリストと実物を前にして、一曲々々に籠められた先達の信仰とその労に敬意と感謝を払いつつ、これらの賛美によって、私達がどれほど信仰を鼓舞され励まされて来たか、と思います。「賛美族」である私達は、出版される賛美はすべて消化して来ました。1989年出版の『新生讃美歌』の編集には山中猛士も加えて頂きました。

1985年に鳥飼教会から依頼された二日市での開拓伝道を引き受け、山中は主事、私は音楽担当(後に音楽主事)で始めました。3名で始めた開拓が、『新生讃美歌』が出版された1989年には既に30名を超えていましたので、献品者を募り、躊躇なく50冊購入しました。爾来、教会に必要なものは献品者を募

って購入する伝統が出来上がりました。各冊に名前と番号を入れます。ハンドベルも、『聖歌総合版』も、改訂版『新生讃美歌』も、この方法で瞬く間に備えられました。

この1989年版は、礼拝、諸集会、特伝、その他あらゆる場で歌いましたので、よく憶えたという意識と、曲数と内容に少し物足りなさを感じたのも事実です。

1990年から『新生讃美歌』(改訂版)の編集が始まります。編集委員の一人に、との依頼があり、賛美歌編集の全容を弁えぬまま、引き受けました。専門が英文学(英詩)であり、今までもソプラノの藤田みどり女史から特伝や賛美集会で独唱される新曲を日本語に訳すことを頼まれたり、森川和子先生からは、リサイタルのプログラムに載せる英語の歌の解説や、歌詞の訳の依頼があったりしていましたので、そうした仕事が私に課せられるのであろうと思っていました。ところが、編集作業は、この項第一回で伊藤隆夫先生がお書きのように、もっと総合的で多岐に亘る、大変な仕事でした。

委員に必要なのは、神学者、牧会者、教会音楽家、それにギリシャ語、ラテン語、ドイツ語、英文学、国文学の専門家、場合によっては現役の詩人も加わることがある、と聞

 ~ 新生讃美歌のあゆみ ~

日本バプテスト連盟創立	1947年
「新生讃美歌」	1957年
「新生讃美歌」	1963年
「新生讃美歌」改訂版	1966年
「新生讃美歌」	1982年
「新生讃美歌」	1984年
「新生讃美歌」	1989年
「新生讃美歌増補」	1997年
「新生讃美歌増補」	1999年
「新生讃美歌」改訂版	2003年

きます。これは英語の賛美歌が多い国では至極当然の事でしょう。（最近では20世紀詩人、T. S. エリオットの詩も賛美歌に加えられているということです。）

Translation is treason.（翻訳は反逆なり）。網島梁川のことば。第7回目のこの項で藤沢一清牧師の、簡にして要を得た記述にありますが、編集で最も時間を要したのは、選曲よりも翻訳の吟味でした。高低アクセントの日本語、強弱アクセントの英語・ドイツ語、長短アクセントのラテン系言語、そしてそれぞれ全く異なる複雑怪奇なイントネーションの仕組み。1音節1語の外国語を、音節言語である日本語1語に訳すことは不可能です。訳詞を音符に乗せるのはこれまた至難の業。加えて文語と口語の問題。これまで数多の先輩達が苦勞された難問に加え、委員の立場、年齢、嗜好の差などにより、侃々諤々の論議が続きました。それは、より良いものを生み出すために必要な手続きであり、むしろ委員自身がより多くを学び得た事でした。

7月に、日本プロテスタント宣教150周年記念大会が東京と横浜で開催されました。500の団体から伸べ16,000人が参加しました。聖書と祈りと多様な賛美を共有し、種々の会衆賛美に、「キリストにあって一つ」の標語

の下、主の臨在を拝し、恵まれました。

然し、一つだけ問題を感じたのは、会衆賛美、「輝く日を仰ぐ時」の折り返しが、歌い継がれた中田羽後師のものでなかった事です。外国語でならともかく、この大きな会衆の賛美で歌う日本語が異なるとは?! 一つの賛美歌に数多くの訳詞があることの危惧が現実となった瞬間でした。

ヒム・エクスプロージョン(賛美歌の爆発)の余波で、新しい賛美歌を創作・出版することは時代の要請であり、文化の多様性を善しとされる主の恵みでもありましょう。各教派はそれぞれのアイデンティティを確立すべく、新しい賛美歌をどんどん創作・発表して行くべきでしょう。その際、優れた音楽性、リズム、和声、歌い易さ、良い内容と共に、良い言葉という基準は大事です。そこから、目を天に向け、キリスト者が一同揃って神の前に立つ時、それはあたかもシナイ山に立ったモーセとイスラエルの如き様ですが、その時の賛美のための曲を、教派を超えて一つに創って行くことは出来ないものでしょうか。賛美歌編集の時から、キリスト者全員の願いでもあり、課題の筈ですから。隣りの韓国のように。

（筑紫野二日市教会）

86番 「輝く日を仰ぐとき」

片山 寛（西南学院大学神学部長）

スウェーデンの作詞家カール・グスタフ・ボーベリ Carl Gustaf Boberg, 1859-1940の歌詞。曲はスウェーデン民謡です。ボーベリは造船所づとめの大工の子どもとして、バルト海に面した小さな港町メンステルオースで生まれました。船乗りをしていた19歳のとき伝道者として生きる決心をして、2年間聖書学校で学び、故郷の町で信徒説教者となります。その後26年間（1890 - 1916）は週刊キリスト教新聞の編集で生計を立てながら伝道しました。真面目な人柄が信頼を集め、53歳からの20年間（1912 - 31）は、スウェーデンの国会議員もつとめています。新聞編集者と国会議員の職歴が4年間重なっているのですが、多くのヨーロッパ諸国に見られるように、スウェーデンでも伝統的に議員は社会奉仕だという原則があり、たとえ国会議員でも、議員歳費だけで生活できる人数枠は限られていたからです。引退後1940年に80歳で死去しました。

ボーベリは若い頃、故郷の近くの海辺を歩いていたときに、突然の激しい雷雨に襲われて、雨宿りをします。しかし間もなく雨は上がって、太陽の光が入り江に差し、小鳥が歌い始め、教会の鐘の音が遠くから響いてきたのを聞いたとき、彼の心は言いようのない感動に満たされました。彼はすべての創造者である神様を讚美する詩を書きました。それがこの「輝く日を仰ぐとき」の原詞だということです。

原題はO Store Gudといひます。スウェーデン語で「おお、偉大な神よ」という意味です。この歌は間もなく、作者自身も知らないうちに、スウェーデン民謡のメロディーにあわせて、バプテスト教会など（当時の）非合法教会で歌われるようになりました。

原歌詞は9節もあってさすがに長すぎるので、ドイツ語訳では6節に、英語ではさらに4節に整理されています。スウェーデン語からドイツ語、ドイツ語からロシア語、ロシア語から英語という順序で重訳され、さらに英語から日本語に翻訳されましたので、元のボーベリの歌詞のどの程度が残っているかはわかりません。どなたか調べてみられたら、讚美歌の伝播の一例として面白いでしょう。

子どものために書かれた賛美歌 - 紹介

江原 美歌子（教会音楽室長）

9月21～23日に天城山荘で開催された教会学校研修会の派遣礼拝は子どもと一緒に礼拝で、子どもたちの「人間をとる漁師」の劇もあり、とても豊かな礼拝となりました。礼拝の始めの賛美は新生讚美歌4番「来たりて歌え」を選曲しましたが、この曲が子どものために書かれた賛美歌とは、あまり知られていないのではないのでしょうか。

この詞ははじめ、ペイトマン牧師（スコットランド出身）の編纂による子どもの賛美歌集に収められ、初行（1行目）は“Come, Children, join to sing”（子どもたちへの呼びかけ）で始まる賛美でした。「ハレルヤアーメン」の繰り返しは子どもが歌いやすいものとなっています。後に、1854年の『教会学校と家庭で歌う賛美歌集』で改訂され現行のようになり、今では全年齢層によって歌われるようになりました。この賛美歌集は1881年までに600万部以上発行され、スコットランドではスタンダードな賛美歌集となりました。Comeではじまる賛美歌は礼拝の招きに相応しい賛美です。

ほかに、子どものために書かれた賛美歌は『主われを愛す』など、19世紀に教育の目的で書かれたものがたくさんあります。新生270番『思いを尽くして主をたたえよ』も子ども賛美歌として紹介されました（1926）。これはアイルランド民謡（CLONMEL）にH.T.マケラス氏が、マルコ12：30『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』のみことばを3節の詞に整えまとめたものです。

子どもたちが、ともに礼拝する喜びや、みことばに親しむことを、賛美歌を通して経験することができます。それぞれの賛美歌の目的を知って、また目的をもって歌うと、さらに豊かな賛美の体験となっていきますね。

地方連合教会音楽担当者会報告

2009年9月8日(火)～9日(水)、連盟事務所にて
地方連合教会音楽担当者会が行われました

報告： 岩崎光洋（教会音楽専門委員）

去る9月8日から9日にかけて、連盟事務所において「地方連合教会音楽担当者会」が行われました。これは、各地方連合の音楽委員が集まり、お互いの活動や課題についての情報交換とネットワーク作りを目的とする会で、4年ぶりに開かれたものです。また今回はお互いの情報交換だけではなく、宣教部教会音楽室が、次期中長期の活動計画を立てるために、各地方連合および諸教会の現状と課題を聞き取りたいという目的もありました。当日は、関西と中部を除く11の地方連合から音楽委員が集まり、江原美歌子教会音楽室長、4名の教会音楽専門委員と事務スタッフ1名の、計17名で熱心な討議がなされました。

8日は、賛美とみことばで開会し、はじめに『新生讃美歌』の成り立ちと現在の教会音楽室の活動について室長から紹介と説明がありました。

『新生讃美歌』の成り立ちについては、日本バプテスト連盟の歴史から見ると、「教会音楽」という言葉が連盟組織の中で使われるようになる以前に『新生讃美歌』が先に立ち上がっていたこと、『新生讃美歌』は伝道集会で使われることを目的として始まり、その後礼拝での使用を目指して曲が増やされて一冊にまとめられたこと、今年度から「賛美歌検討委員会」が立ち上げられ、『新生讃美歌』に収録されている賛美歌の評価と新しい賛美歌の研究を進めていること、等が分かち合われました。また、協力伝道の実として生み出された『新生讃美歌』の普及推進のために作られているCD-ROM、新生讃美歌ニュースター、現在計画されている音楽CDの製作などについても紹介されました。

現在、教会音楽室が各地を回りながら開催している「全国礼拝音楽研修会」についても、これまでの経過報告と今後の予定について説明があり、その他、聖歌隊楽譜の出版、パソコンによる教会音楽ネットワークの活動などについて紹介されました。

8日の午後から夕食までの時間は、各地方連合から現状と課題、活動の報告がなされました。出席者は、他の地方連合の報告を受け熱心にメモを取り、各地方連合で取り入れることができそうな事、新しい活動についてのアイデアを得る良い機会となったようでした。また課題についてはいくつかの地方連合で共通するものも見受けられました。3点に絞って紹介します。

1 地理的制約からくる活動の難しさ

研修会等を開催しても集まりにくい、いつも同じ顔ぶれしか集まらないという事が報告されました。また、地方連合の中で音楽委員が1名のみというところでは、なかなか思うように活動できない、課題に対する問題意識はあってもその解決のためのアイデアに行き詰ってしまう、協力者を求めようとしてもお互いの住んでいる距離が遠くて集まらない、等といったことが報告されました。

2 地方連合内の音楽奉仕者のネットワーク作り

各地方連合内の音楽の賜物を持っている人材を把握して、要望があれば派遣する、また各教会の奏楽奉仕者がそれぞれの課題を共有したり励ましあったりするネットワークを作り上げる、など、ビジョンが分かち合われました。

3 継続的研修の難しさ

研修会に出席しても、それが個人の研修で終わってしまい、教会の事柄にならない、研修会直後は燃やされているが、後がなかなか続かない、といった現状が見えてきました。

報告の時間の中ほどには、賛美の時間が設けられ、新しく発行された『バプテスト・ユースソングブック』の中から数曲を共に賛美する時間が与えられました。

夕食後は「教会音楽フォーラム」が設けられ、それまでの報告などから見えてきたいくつかの課題について、自由討論の形で討議する時間となりました。教会音楽専門委員の斉藤信一郎委員による司会で、スムーズに討議が進められました。

ある出席者からの「昔は教会の聖歌隊と言えれば若者が活躍する場であったが、近年では聖歌隊と言えれば高齢者が多い。バンド活動は比較的若者に人気があるが、もっと他に若者を取り込むことができる教会音楽の活動は無いのか。」という問題提起から始まり、所謂「若者」が教会音楽奉仕者の中で少なくなっているのではないかという点について話し合われました。参加者の数名からは、それぞれの教会での取り組みが紹介され、また現代の「若者」が同世代同士でしか連帯できなくなっているのかもしれないといった時代的・世代的側面についての指摘もありました。また「若者を話題にする前に、まず自分たちが教会でど

う立っているのかが問われている。」「暗い顔をして歌っている聖歌隊には魅力を感じないだろうし、魅力を感じさせるレベルを目指したい。」といった意見が出されました。

後半は、教会間の交流ということがテーマとしてあげられました。「礼拝プログラムや教会のあり方、音楽スタイルなどについて、それぞれの経験に凝り固まっているところは無いだろうか」という発言から始まり、さまざまな意見が交わされました。説教者の交換講壇や証し者の交換、複数教会による合同礼拝、伝道隊やチームの派遣などの取り組みが、さまざまな委員から紹介されました。そのような中で「バプテストにおいては“会衆が共に”という言葉がキーワードなのではないか」という発言があり、共に集まり共に礼拝することの大切さ、また共に賛美し礼拝するために、各地方連合の音楽委員は、情報交換や学びの場の提供などの働きを託されているのだということが話し合われました。

8日は、前年度行われた「新生讃美歌アンケート」と「新生讃美歌評価会」について江原教会音楽室長より報告を受けました。エキュメニカルなキリスト教の流れがある中で、教派によってさまざまな讃美歌が歌われていることから来る問題点が指摘され、他教派の信徒たちと交流を持っている参加者から、同じような問題意識が他教派の中にもあること、また同時に独自の讃美歌集の必要性等が意見として出されました。

プログラムとしては最後の枠となる「分かち合い」の時間では、天城山荘での開催が25年ぶりとなる、2010年「全国礼拝音楽研修会」のアピールがありました。そして、そのアピールを話し合いの導入として、今後、教会音楽室や地方連合で企画されるであろう「音楽研修会」のあり方について、意見交換がなされました。すでに触れましたが、研修の継続の問題、個人の研修を教会の事柄にしていくための働きかけの必要性が話し合われました。また、依然として「奏楽者がいない」等の教会からの声が聞かれるといった指摘から、初心者育成の意義、教会音楽の裾野を広げていくためにもたれている「全国礼拝音楽研修会」の分科会に期待されることについても話し合いました。

「分かち合い」の最後には、各地方連合の委員から「これから取り組みたいこと」について、ひとことずつ熱い思いが分かち合われ、それぞれの言葉に大いに励まされつつ、派遣の祈りによって会が閉じられました。

今回の音楽担当者会を通して、顔を合わせて共に語り合い励まし合う大切さをあらためて感じさせられました。いまだに地方連合の中では「音楽」に対する意識が低いところがあるように思います。そのような現実の中で、1人で孤軍奮闘して働いておられる音楽委員の方もおられました。そのような人を祈りをもって支えるためにも、同労者の繋がりは大切です。地方連合の音楽委員の方々の中には、地方連合内での音楽奉仕者のネットワーク作りに熱心に取り組んでいる方もおられ、連合同士もしくは連合を超えた音楽担当者のネットワーク作りは協力伝道に不可欠なものであると思われました。最後に寄せられた感想には、「このような会を5年に1度ではなく、2年に1度ぐらいのペースで開いてほしい」というものがありました。予算の関係上難しさがありますが、お互いに励ましあい祈りあう主にある同労者の出会いの場が、また近いうちに持たれることを願っています。

『新生讃美歌ニュースレター NEWSONG』バックナンバー、新生讃美歌アンケート、新生讃美歌評価会報告書等についてのお問い合わせは、教会音楽室事務までどうぞ！

TEL: 048 (883) 1091 E-mail: kyokai-ongaku@bapren.jp



第7回全国礼拝音楽研修会 (於：天城山荘)

2010年8月23日(月)～25日(水)

基調講演： 濱野道雄 (日本バプテスト 連盟宣教研究所 所長)

教会音楽担当者だけでなく、「礼拝」に集う全ての方へ
ご一緒に学び、賛美の恵みを分かち合いましょう！

2010年夏は 天城山荘へ！

音楽研修会だより～山形教会

各地方連合や教会で行われている教会音楽研修会。
その恵みを全国の皆さんと分かち合っていきませんか？
研修会便りを、教会音楽室までお寄せ下さい！

東北地方連合 山形キリスト教会の青山裕一さんから
教会音楽ネットワークに届いた、
研修会便りと教会音楽への取り組みをご紹介します。

研修会便りのバックナンバーは、教会音楽室事務までお問合せ下さい。
TEL: 048 (883) 1091 E-mail: kyoukai-ongaku@bapren.jp

礼拝奉仕者研修会 ～教会音楽について～

青山 裕一

山形教会ではここ数年に亘り、主日礼拝に携わるすべての奉仕者を対象に、年に3回の研修を行っています。

対象者としては、司式者（司会者）、指揮者、奏楽者、受付、案内、ナースリーと礼拝音楽委員です。

使用される資料はその年によって異なります。これまでに主日礼拝の意味や形式（順序）を聖書的、歴史的、教派的（バプテスト）に理解したり、礼拝の中でのプログラムの意味、またそこで捧げられる祈り、各奉仕者の位地付けや働きなどを学んできました。

今年度の最初の研修は、7月12日（日）の午後行われ、その中で、最近出版された『キリスト者の礼拝：神学と実際』から教会音楽を取り上げ、その働きと意味について、再度確認する機会がありました。

「教会音楽」というとどうしても、「奏楽者」「聖歌隊」「指揮者」など、「実際に音楽の働きに携わる方のもの」と捉えられがちですが、礼拝の中での位置付けや各讃美歌の持っている性格（証し、祈り、召命など）や方向性（神人、人神、人人）、また、会衆讃美についてもその意味や歴史なども踏まえて、川上牧師からお話をいただき、良い学びと時となりました。

具体的な形で教会音楽に携わっていない上記の奉仕者からも、「礼拝の中の讃美」「礼拝と音楽の関係」について「よくわかった」という声と同時に、教会音楽奉仕者が礼拝へ臨む上での準備や工夫、配慮などに対する理解にも及び、大変感謝な時にもなりました。

新ピアノ購入と奉献式

山形教会では、予てよりピアノの老朽化と不具合により、礼拝音楽委員会を中心に新しいピアノの購入を検討、祈り捧げてきましたが、この度、新しいピアノを導入することができました。

7 / 5 (日)

主日礼拝後、説明会を開催。

これまでの経緯と現在のピアノの状態、礼拝の中での音楽の役割の確認、新しいピアノの選定基準や財政面も入れて、実際にピアノを弾かない方にもわかるようにお話し、理解していただきました。

7 / 27 (月)

これまで使用していたカワイのアップライトピアノを買い取り業者に引き渡し(リサイクルされて、アジアに輸出されるとのこと)、翌28日(火)には新しいピアノが納入されました。

様々な種類の讃美が捧げられるバプテストの礼拝の特徴から、音質のことはもちろん、音量も充分兼ね備えているもの、さらに

長期使用に耐え、現在の会堂の大きさも考慮しながら、将来予想される新しい会堂建築のことも見据えて、Bostonの奥行き163cmという小型のグランドピアノを設置。

8 / 2 (日)

今年度の活動主題「新しい歌を主に向かって歌おう」(詩編96:1~2)のもと、新しいピアノで、思いも新たに主に豊かな讃美が捧げられ、続いて奉献式がありました。

詩編150編が読まれ、納入への感謝と新しい楽器が主に豊かな讃美を捧げる道具として用いられることへの願い、また奏楽や聖歌隊の働きなどの教会音楽について、この度の納入に関わった方々と一緒に祈りを捧げました。

備えられたこの楽器を十分に用いるために、奏楽者の一人として、より研鑽を積み、祈り、準備し、最善の精一杯のものを主に捧げ、音楽を通して主に仕えようと改めて感じたところです。

全国礼拝音楽研修会

ご参加下さい!!

- | | | |
|-----|---------|---------------------------|
| 第5回 | 東北・仙台教会 | 2009年11月23日(月・祝) |
| 第6回 | 関西・神戸教会 | 2010年1月11日(月・祝) |
| 第7回 | 全国・天城山荘 | 2010年8月23・24・25日
(月~水) |